

洋式生活を教えた人々

——近江八幡・家政塾について——

川 崎 衿 子

I. はじめに

米国の青年ウィリアム・メレル・ヴォーリズ (William Merrell Vories) は、1905年 (明治38) の2月に近江八幡の駅におりたった。後にヴォーリズの全ての事業、全ての生活の協力者となった吉田悦蔵は、当時のことを次の様に書いている。「……その2月2日は北風の吹く厭な日であった。……僅かばかりの旅客の乗り降りの混雑の中に、立襟した濃紺色格子縞の着古びた外套、山高帽、肩よりななめにかけた写真器も古そうな姿に、白色人種特有の美しい歯を出して淋しく微笑しながらたっている。年の頃は18とも20とも判断できぬ、若さをもったアメリカ人がいた。それがヴォーリズさんである」⁽¹⁾ ヴォーリズの来日の目的は、滋賀県立商業学校 (現県立八幡商業高校) の英語教師として赴任するためであった。この時、彼は24才、その後この地に死ぬまで居つくことになろうとは、想像だにできなかったにちがいない。

近江八幡は、当時町制が施行されたばかりの人口約7400人の小さな町であった。八幡の歴史は古く、1585年に豊臣秀吉の甥、秀次が八幡山に城を築き城下町として開いたことから発展した町であった。秀次は城下町完成後、商工業の保護と促進をはかり、その結果、八幡の商業は栄え、多くの豊かな商人が輩出した。彼らは天秤棒一本から商売を始め、巨万の富をつくりだしたといわれ、現在でも往時の繁栄をうかがうことのできる豪商の屋敷が

町並みとともに保存されている。1595年秀次の失脚とともに、城下町としての体制は崩壊したが、その後、町を盛りたてていったのは、いわゆる当地の近江商人で、彼らは日本全国に活躍し、その経営と才覚は様々な所で発揮されてきた。

ヴォーリズは、この地で英語教師をするかわら、放課後バイブルクラスを開き、キリスト教の伝道にも熱心であった。そのため2年後には、解雇されたが、それを機会に自らのキリスト教団「近江ミッション」をおこし、一方で伝道活動の資金源として建築設計を始め、さらに輸入雑貨販売の実業にも着手した。家庭の常備薬として全国津々浦々に広まったあの有名なメンソレータムは、確実に近江ミッションの活動を支え、また建築設計では、教会、学校、病院、住宅など実に1500件を超える数をこなし、彼の名声を高める要素にもなった。ヴォーリズの人柄やその活躍ぶりから、良き理解者にも恵まれ、地域の教育事業にも多くの影響を残している。とりわけ、キリスト教的使命感からの生活改善の取り組みは、洋式生活を通して、具体化されていったと考えられる。ヴォーリズは住宅の設計を通してこれを説き、そしてミッションの女性達は生活を通してこれを伝えた。1933年 (昭和8) にミッションの活動の一部として設立された「家政塾」は、衣食住にわたって洋式生活を教え、近郊の若い女性の憧れの的であったともいわれる。本篇では、家政塾の成立過程及びそこに携わった人々の生活行動、意識を明らかにすることとした。

II 近江ミッシヨンの歴史と事業

1. 近江ミッシヨンの創生

近江ミッシヨンはウィリアム・メレル・ヴォーリズの来日とともに始まる。ヴォーリズは1880年（明治13）にアメリカ・カンザス州のレブンワースに生れた。両親ともに教会活動に熱心で、キリスト教の雰囲気満ちたあたたかい家庭に育った。ヴォーリズは高校生の頃よりYMCAに参加し、そしてコロラド大学で哲学をおさめ卒業をしたが、大学での最初の専攻は建築学であった。卒業と同時にコロラド、スプリング市のYMCAに就職した。以前より海外伝道に対する希望を持っていた彼は、東京YMCA⁽²⁾からの求人依頼にすぐさま応じた。そして、そこから滋賀県立商業学校に英語教師として派遣されることとなった。1905年（明治38）2月2日、彼は未知の国日本、そしてさらに未知の地、近江八幡に到着した。この時、彼の知っていた日本語は、おはよう、さようならだけで、日本についての知識は皆無であった。英語を話す人もいなければ、町の様子も淋しく非常な孤独を感じたことであろう。すぐにでも帰りたい気持ちにおそわれたことを、後の回顧録で書いている。

彼の最初の住居は魚屋町の、東向きの採光の悪い古い大きな町家であった。そこで彼はコックと共に2年間暮した。ここで放課後、彼は商業学校の生徒達を集めてバイブルクラスを開いた。

ヴォーリズには、当地の若者達は、たばこも、酒も、女遊びもする様な青年期の罪悪をおかしているとうつった。彼らに神の国についての話をし、「肉においても世の人々より強く、霊においては特に先覚者たるべきではありませんか。禁酒禁煙は直接に自瀆の欲を起す刺激を少なくするのです。運動と祈りと聖書を読むことによって諸君は心の清い人になって下さい」と教化した。⁽³⁾このことは、青年達の

心に深く浸透し、彼を慕う者の数も増々多くなっていった。バイブルクラスの人数は増え、やがて八幡YMCAとして組織されていった。そして、1907年（明治40）2月、彼の熱意とアメリカ、日本での篤志家の助けをかりて、為心町に彼の設計によって、八幡YMCA会館が建設された。完成とともに、会館の一室にヴォーリズは居を移し、2階の北側の部屋を本拠にして、ここに7年間暮した。

一方、YMCA会館が建った直後、彼はその熱心な伝道活動が原因となって商業学校の職を解雇された。それは商業学校の卒業式の日であった。その卒業生の中に、彼のバイブルクラスからのつき合いであった吉田悦蔵（旧姓井上）がいた。この日、同じ志をもつヴォーリズと悦蔵は、共にお互いの新しい出発に向けての感動的な誓いをした。一身をこの湖畔の土に埋めるため、一生を福音伝道に捧げると2人は固く決心した。

ヴォーリズの解職を知って各地より英語教師としての招聘の依頼が来たが、彼は八幡を動かうとはしなかった。ヴォーリズは八幡を世界の中心と定め、ここから彼独自のキリスト教事業を発展させた。これが近江ミッシヨンの創生であった。

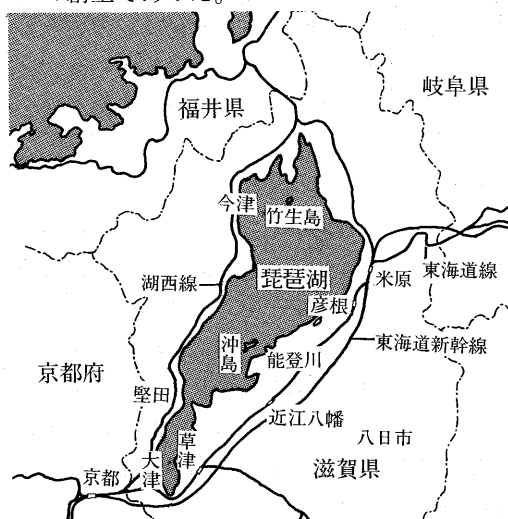


図1 現在の近江八幡周辺と琵琶湖

2. 伝道活動とそれを支える事業

悦蔵と2人で近江ミッションを設立し、2人で共同生活を始めたものの、経済的には逼迫した状態が続いた。ヴォーリズは建築設計の仕事に本気でとり組み始め、その仕事で得た報酬すべてを近江ミッションの活動資金に当てた。八幡YMCA会館は、キリスト教事業と、それを支える仕事の場となった。

琵琶湖周辺での伝道は活発化し、今津、堅田、水口、野田、米原、愛知川、能登川、八日市などに近江ミッションの支部がつくられた。同時に、これらの地域のキリスト教会も彼の設計で建設が進められた。こうして両事業が多忙になるにつれ、建築設計での強力な協力者が必要となり、ヴォーリズはアメリカに一時帰国し、アメリカ人建築技師を連れて再び八幡に戻った。彼はチャーピン（Lester Grover Chapin）と言い、ニューヨークのコネル大学建築学科を卒業したばかりの青年であった。ヴォーリズ、悦蔵、チャーピンの3人は、1910年（明治43）にヴォーリズ合名会社を設立し、翌年魚屋町に事務所を開いた。この時資金援助をしたのは、悦蔵の母、吉田柳子であった。柳子はこの時はまだ仏教徒であったが、後に近江ミッションの母と呼ばれるまでのクリスチャンになってゆくのである。

このキリスト教事業に、多くの協力者が加わっていった。商業学校での教え子であった村田幸一郎、佐藤久勝、地元でキリスト教運動に力を注いでいた武田猪平、早稲田大学で英語科講師をしていたウォーターハウス（Paul B. Waterhouse）らは強力な同志としての結束を固めていった。

1912年（明治45）にミッションの機関誌「湖畔の聲」が創刊された。これは昭和の激動の時代を通じて、ミッションの幾たびかの改革の波にもまれながらも現在にいたっても引き続き発行されている。

1913年（大正2）にはアメリカ、メンソレ

ータム社の日本での生産販売権がヴォーリズに与えられた。メンソレータム社の創業者ハイド（A. A. Hyde）とヴォーリズ、悦蔵はアメリカで催されたキリスト教の大会で初めて会い、その時に結ばれた固い友好の絆が、代理店契約を実現させた。さらに、ハイドは琵琶湖での伝道の助けになるようにと、一艘のモーターボートを寄贈した。これはガリラヤ丸⁽⁴⁾と命名され、1915年（大正4）から湖畔伝道船として大きな役目を果していった。

この様に、ミッション全体は順調に発展してゆき、その組織は増々複雑化していった。1920年（大正9）には、近江ミッションはW. M.ヴォーリズ建築事務所と近江セールズ株式会社に分割され、さらに、メンソレータムを扱う部署が、薬品メンソレータム部として独立していった。

近江ミッションの事業は、大正後期には、以下の様な事業が展開された。

年は開始年を示す

1. 八幡YMCA会館 1907(明40)
2. 「マスターシード」の発行 1907(明40)
「湖畔の聲」の発行 1912(明45)
「トラクト」その他の図書出版
3. ガリラヤ丸建造 1915(大4)
4. 通信伝道部 1915(大4)
5. 近江療養院 1918(大7)
6. 米原紫苑会館 1921(大10)
7. 米原紫苑幼稚園 1923(大12)
8. 清友幼稚園及び運動場 1922(大11)
9. 八幡英語学校 1923(大12)
10. 今津、壁田、日野、水口、野田、武佐における定期集会
11. 八幡人事相談所

III 近江ミッションの女性たち

1907年（明治40）八幡Y M C Aが建ち、ヴォーリズ、悦蔵がそこに暮している頃、京都Y M C Aの創設者フェルプス（G. S. Phelps）の案内で、3人のアメリカ女性が近江八幡を訪れた。フェルプスは、建築設計でも伝道でも常にヴォーリズの支えとなった人物であった。ヴォーリズ、悦蔵はこの一行を歓迎し、その結果この3人からミッションの事業に1000ドルの寄付を受けるという幸運に恵まれた。この1000ドルで八幡の池田町に土地を買い、悦蔵の母柳子の資金援助によって、ミッションのスタッフの住宅が次々と建てられた。1913年（大正2）に吉田悦蔵邸、ウォーターハウス邸がまず建てられ、翌年にはヴォーリズ邸が建てられた。丁度その頃、ヴォーリズ、悦蔵はアメリカを旅行中であったから、これらは留守中の建設であったが、2人は帰国早々、この住宅に入った。また1921年（大正10）には二家族用のダブルハウスが建てられ、ここには、ヴォーリズの両親、建築事務所のスタッフ、アメリカ人の教師達が次々と住んだ。

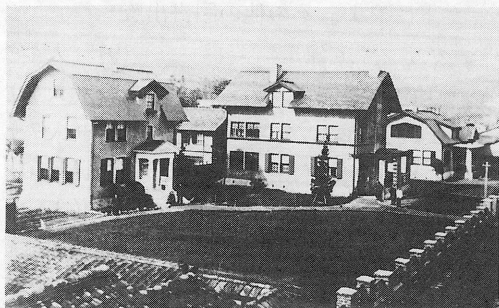


写真1 池田町の近江ミッション住宅（左より吉田邸、ウォーターハウス邸、ヴォーリズ邸）

そして以後、ここはミッションの拠点となり、名実共にミッションのシンボルとなった。近江八幡は、近江商人の全盛期に建てられた住宅がいまもなお残る様な古い町であり、当時の人々にしてみれば、あたりの光景とは全く異なる西洋館が出現したのであるから、そ

の驚きは相当のものであったに違いない。物珍しい西洋館を一目見ようと近郊から集まる人々も多くあった。この時、悦蔵は22、3才の独身の青年であったが、彼は早くも、ここで自分の家庭を持ち、この住宅が自分の夢を満してゆく基盤になると信じていた。大きな居間や、食堂は客が集まりやすい様な雰囲気を持ち、そして実際に多くの人々に利用された。その夢の実現のための最大の力となったのは、悦蔵の妻、清野であった。清野はここを婦人会に開放し、料理などを教えた。これが家政塾の出発点となった。

それより以前、ミッションの創立期は、悦蔵は勿論のことヴォーリズやその他のスタッフも独身であり、いわゆる女手のない不自由な生活を送っていた。柳子が八幡に呼ばれたのは、その様な事情からであったが、1911年（明治44）には新築されたばかりのヴォーリズ合名会社内の座敷に、柳子は女中を連れてやってきた。仏教徒であった柳子はミッションの住宅に住むのに、仏壇とさらに煙草を持ち込んだ。もとよりミッションは禁酒禁煙をモットーにかかっていたが、それにも拘らず柳子の2つの条件に目をつぶったことは、柳子への期待と親愛の情からであった。



写真2 近江ミッション初期の頃の関係者
前列 吉田柳子、後列 左より村田幸一郎、
チェーピン、清水安三（後に桜美林学園
を創立）、一人おいて吉田悦蔵、武田猪平、
右端 ヴォーリズ

独身であったミッションのスタッフも村田

が、結局柳子は「お前はキリスト教を真面目に研究した時は、必ず仏教の悟りに入るのですから、しっかりやりなさい」と言い、それに対して悦蔵は「お母さん、仏教を一生懸命やりなさい。私はキリスト教を一生懸命やります。そして5～6年してその上で話し合いましょう」と言った。そして、不幸にも長女まつをわずか13才で亡くしたばかりの柳子は、その関係のまま、悦蔵、ヴォーリズのもとにやってきた。毎朝毎夕、念仏を唱え、木魚をたたいたが、ヴォーリズは、屈託なく柳子をマザーヨシダと言って敬い大事にした。その様な雰囲気や親切、真心がお互いの理解を深め、八幡に来て一年も経たぬ間に、柳子は仏壇を国に送り返し、位碑を寺に納めて、1912年（明治45）の春に洗礼を受けクリスチャンとなったのであった。この時に柳子に強い影響を与えたのは、水戸からたびたび訪れていた伝道活動に熱心なクエーカー教徒のビンフォード夫人（Mrs. Binford）であった。彼女の話は柳子の胸を打つものがあり、あれ程好きであった煙草もきっぱりやめることができた。鐘と木魚は讃美歌にかわり、熱心な仏教徒は熱心なキリスト教徒になっていった。

悦蔵は1912年（明治45）の秋から1914年（大正3）の春の間、柳子の資金援助で最初の洋行をするが、この間柳子は東京の聖書学校に入学しバイブルを勉強し、また英語の勉強も始めた。もともと意志が強く、忍耐を知っている柳子の性格は、人のために尽すことを苦勞とせずそれがために多くの人望を得ることができた。



写真3 吉田柳子

悦蔵、村田、チェーピンらと湖畔での伝道を積極的に行い、柳子はミッションの心の要となった。

柳子の存在はミッションの団結を確かなも

のにし、ミッションの活動範囲は拡大した。それに伴いミッションには様々な外人宣教師達が訪れた。その頃の写真をみると、池田町のミッションハウスかいわいは、まるで外人租界の様に感じられる。大正年代に近江ミッションに所属していた宣教師達だけでもゆうに20人を超えていた。ここで、プロテスタント宣教師達の来日事情について簡単にふれておこう。

1859年（安政6）7月、日本は鎖国を廃し神奈川、長崎、箱館を開港することとなった。これに伴って、アメリカのプロテスタントの各教派は、日本への伝道を積極的に企て、次々と宣教師を日本に送り込んだ。これがプロテスタントの日本上陸の端緒で、16世紀の切支丹（カソリック教）とは全く異なるものであった。宣教師達は伝道をしながらも英語を始めとして西欧の学術を教え、或いは聖書の和訳、辞書の編集にも携わり、明治の文明開化期において、我国の教育文化に多大な貢献をした。現在のキリスト教系大学の殆どは、その頃来日した宣教師達が設けた小規模な私塾を出発点としていることから、伝道と教育は一体となって推進されてきたことが解る。

特に社会的に地位の低かった女性の人格教育を根本にして女子教育の向上を計ったのはアメリカの女性宣教師達で、女子学院、フェリス女学校、青山学院、神戸女学院、同志社女学校、立教女学校、活水女学校などが、1870～1879年の間に創立されている。女子教育の勢いは、ミッション資金や、宣教師達の援助によって非常に急速に進み、欧米文化の吸収では時代の先端をいっていたともいえよう。

一方、明治政府は、その文教政策によって官公立の学校に英米から学識ある教師を迎えてはいた。しかし、その恩恵に授れない地方の中等学校ではなかなか外国人教師を迎えることはできなかった。この実情からYMCAは、

その様な所に教師を派遣することは、伝道を促進するにもよい機会であると考えた。そしてアメリカ、イギリス、カナダの若い大学卒業生達を日本の中小都市の学校に、英語教師として組織的に送る計画を企てた。YMCAの紹介により日本に送られた英語教師はアソシエイトティーチャーと呼ばれていたが、この計画によって明治年間には、およそ100名が日本の学校に勤務した。日本側の要請した条件では、

1. 日本語の知識なしに英語教育の機会を与える
2. 課外には自由に聖書を教えてもよい
3. 旅費は支給されないが立て替え人がいれば、給料より返せばよい

ということであったので、殆どの青年教師は放課後バイブルクラスを開いた。彼らは任期のあと本国に帰り名を上げた人も多かったが、そのまま日本にとどまり、日本の青少年の精神文化に新しい思潮を送ることに専心した人もいた。

ヴォーリズの赴任も、それらの一連の計画の中の一つであったから、彼は来日当初からYMCAを通じての友人・知人関係は広がりを持っていた。

ヴォーリズ、悦蔵の事業が繁栄するに従い多数の友人・知人が八幡に集まり、ミッションの本部吉田邸も多くのお客様にぎわった。多くの外人宣教師やその夫人達の中にあっても柳子は堂々としていた。大柄であったために背の高い外人に混ってもひけをとらなかった。柳子はよく働き、人のめんどろをよくみて、喜んで客を迎え、神の道を説き、信徒との交わりを多く結んだ。そんな柳子の気がかりは悦蔵の結婚であった。

自分の辛く苦勞の多い結婚生活から、悦蔵には円満で幸せな家庭を持ってほしいという柳子の願いは強かった。そんな折、水戸のビンフォード夫人から聞いた女性の話は柳子の

関心を強めた。柳子は、ついにその女性に会うために水戸に出向く決心をした。45日間もの間、水戸に滞在し、その女性渡辺清野の性格、生活態度を観察した後、悦蔵の妻にふさわしいと判断をした。こうして渡辺清野は望まれて吉田家の嫁となった。1916年(大正5)10月15日、八幡町のキリスト教会で結婚式が行われた。

その翌年、柳子は丹毒から容態を急に悪くし、1917年(大正6)5月21日、皆にみとられながら50才の生涯をとじた。

2. 吉田清野

柳子に見染められ吉田家に嫁いだ清野は、1888年(明治21)7月4日に山形県上山町に生れた。清野の祖父は羽州上の山三万石の城主松平家の勘定奉行渡辺九十郎といい、父は渡辺光太といい、宮崎県の土木課に勤務する官吏であった。清野をもうけたあと光太は、32才で洗礼を受け、信仰のある家庭を築いた。清野の結婚後は近江ミッションのスタッフとなり、17年もの間近江療養院の事務長を務めあげた。

清野は、1902年(明治35)4月に東京・芝区、聖坂の普連土女学校⁽⁵⁾の予科に入学し、引き続いて本科に進学、そこで4年間勉学の後、1908年(明治41)3月に卒業した。そしてさらに、聖経女学校⁽⁶⁾の平日部に入学して聖書の研究をおさめ、母校の普連土女学校に戻り保育事業に携わった。その後、水戸のクエーカー教の宣教師ビンフォード夫妻の招きを受け水戸に移り、そこで清野は9年間を過した。



ビンフォード夫人

写真4 吉田清野

と柳子の出会いから清野は悦蔵の妻になり八幡の人となった。この時悦蔵は26才、清野は28才で、夫より2才年上の花嫁であった。清野は結婚の話がもち上った時、自分が年上であったことにこだわったが、逆に悦蔵は年上の考えのしっかりした事業を助けてくれる様な女性と結婚したいという意志を持ち続けた。悦蔵のよき相談相手となって、理想に向って共に歩み、困難を分かち合うことのできる人として清野は悦蔵の思い描いていた女性であった。

結婚してから清野が柳子と共に暮した時は余りにも短かく、柳子の死をもって、わずか半年あまりで終ったが、柳子亡き後、清野は名実ともにミッシェンの婦人部のリーダーとなり活動をしていった。清野は東北育ちであったので、関西では言葉に随分苦労をしたらしい。そんな清野を悦蔵は言葉づかいから教育した。農村伝道には可能な限り連れ歩き、また外で珍しいおいしい料理が出されれば、料理法を聞き清野に教えた。そして頻繁に訪れる客のもてなしを通して、特に料理の知識と技術を積むことを清野は率先して行った。

1917年（大正6）10月に長男希夫が生れた。次いで1919年（大正8）5月には信子、孝子の双生児に恵まれた。同じ年の6月にヴォーリズは一柳満喜子と結婚式をあげ、近江ミッシェンはたび重なる喜びに湧いた。

当時、自転車は都会でもハイカラな乗物で特に女性が乗る姿は新時代の到来をより強める効果があった。明治36年に出た小杉天外の「魔風恋風」では時代の先端をゆく男女の生息が描かれているが、その中の口絵には袴をはき、頭にリボンを着けて自転車に乗る目白の女子大生が載っている。女性と自転車の組合わせは、特に保守的な地方の人々には大きな衝撃であったであろうが、清野は八幡で最初に自転車に乗った女性であった。彼女の忙しい生活、熱心な伝道活動には自転車は欠かせぬものであった。時には誤まって道から落

ちたり、池の中に投げ出されて大怪俄を負うこともあった。伝道は、雨や雪の日、闇の晩もあり、また細い道、泥の道、道なき道をも超えてゆかねばならなかった。清野はその様な悪条件の中を精力的に各地の集会に出席し、講演をすることによって、ミッシェンの婦人部を志高く導いていった。

池田町に建った吉田邸はミッシェンの本部であり、また迎賓館でもあったが、さらに清野を中心とする婦人部の本部となった。もともと柳子やヴォーリズの母ジュリアやウォーターハウス夫人、ヴォーゲル夫人達を核にしていたミッシェンの女性達の数次第に多くなり、大正10年代には、ヴォーリス夫人満喜子、清野、村田夫人などを中心として20名を超える組織を成すまでになってきた。その結果、近江ミッシェンの中で婦人部の位置が確立し、本部からの予算措置が明確に行われるようになった。そこで、伝道や近江療養院の患者訪問、修養などの他に例えば、英会話、編物手芸、ピアノを素養のある女性達が指導を始めることになった。また、特殊なものに、体操、ろうあ教育などが開始され、教育に対する意志が具体的に表われてきた。また婦人部は教会の婦人会とも協力をし数々の講習会を開いた。中でも人気のあったのは清野が指導する料理教室で、各地の要望に応じて清野は出張し、意欲的に働いた。

西洋への憧れ、西洋料理に対する関心は、キリスト教とも重なり若い女性には十分に魅力的であった。文明開化以来、西洋料理をいち早くとり入れたのは、政府の高官や上流階級の人々で明治半ばあたりまでは、彼らの独占物であった。その後、東京、横浜、神戸などの外人居留地にできたホテルやレストランを通して一般に普及していったが、あくまでも専門料理店で食べる高級料理であった。しかし、大正期になると女学校などで教育を受

けた女性達は、料理のみならず西洋文化を家庭に持ち込む役割を積極的に果たようになった。

清野は9年間の水戸での生活の中でビンフォード夫人から手ほどきを受けたが、より一層の西洋料理研鑽のため、1922年（大正11）2月、単身アメリカに渡った。サンフランシスコ、パサディナ、ニューヨークと移動しながら食物の研究をし、9月に多くの成果を持って八幡に帰ってきた。清野は前にも増して多忙となったが、それは端目には働き過ぎとも感じられた。

清野が多忙を極めているなか、悦蔵とヴォーリズは、またも1930年（昭和5）3月から7月にかけてアメリカ旅行をした。さらに悦蔵は1932年（昭和7）の2月2日、3度目の外遊に出発した。アメリカ、カナダ、イギリス、フランス、イタリア、エルサレムからシンガポール、香港、上海などをまわり6月1日に神戸に帰港した。悦蔵の帰朝ほどなくして7月に清野は乳癌と診断され大手術を受けることとなった。元来、病気などをしたことのない清野であったから、医者から癌の宣告を受けた時の悲痛な思いは強かった。手術、そしてその後の経過は良好で、清野はこの時再生への感謝を「湖畔の聲」12月号に書いた。自分の余命は神の国のため、近江ミッションのため、我家のために尽すと固く心

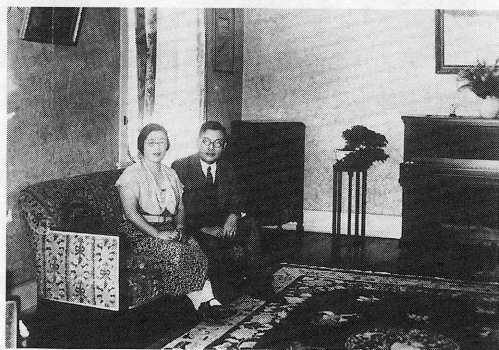


写真5 1932年 吉田悦蔵・清野

に誓った。退院し健康を回復してからの清野は、感謝の心を伝えるため日本全国を巡り、また新しい構想をもって料理教室を再開した。

1933年（昭和8）4月、悦蔵は近江勤労女学校と向上学園を創立させた。これは悦蔵の教育観を探る上では重要な鍵を握るもので、女子教育に労作の体験と、生活力を養う実習を取り入れ、さらに芸術性を養う授業を実行した学校であった。

同じ年の10月、清野は家政塾を創立した。悦蔵は43才、清野は45才にして各々自分の信念を具現化するべく自分の学校をつくった。この後、清野は1937年（昭和12）5月から約一月間、悦蔵と共に中国を旅行し、この時も清野は盛んに食物の知識を吸収した。常に研究努力を惜しまぬその態度は、自然に人望をも集め、小さな料理教室を、やがて家政塾に発展させていった。

2. その他の人々

近江ミッションにとって重要な女性は、この他にも何人かをあげることができる。その一人はヴォーリズと結婚した一柳満喜子である。満喜子は、1877年（明治10）に子爵一柳未徳の三女として生れた。満喜子の兄・恵三は関西の名門廣岡家に婿養子に入り、この縁で満喜子は廣岡家に身を寄せていた。御茶の水高等師範の付属小学校から、女子学院に進み、さらに神戸女学院で勉学を重ねた後、アメリカに留学した。8年に及ぶアメリカ滞在中に児童学、保育学の研究を修めた。

ヴォーリズが廣岡家の依頼で、東京や神戸の住宅を設計していた頃に満喜子はアメリカから帰国した。二人は設計の打合わせで顔を会わせる機会を重ね、結婚へと進んだ。結婚式は1919年（大正8）に東京・明治学院のチャペルで行われた。一柳家、廣岡家のパトロネージを得て、ヴォーリズの建築設計での仕事はますます発展した。昭和年代の戦争色が

進む中、1941年（昭和16）にヴォーリズは日本国籍を得、一柳米来留と名のり、残りの半生を生きた。

満喜子は清友幼稚園を創設するなど、教育活動に熱心であった。しかし、彼女のいくらか特殊な性格は、周囲の人々を困惑させることも多かった。そのため、ミッション全体の共働という観点、或いは家政塾の成立過程では、その果たした役割は大きいとは言えない。

従ってここでは、満喜子についての詳細な記述を省いた。

一方、ウォーターハウス夫人は、ミッション成立当時からの貢献者であり、家政塾の成立に大きな足跡を残した。自ら率先して人々を集め、よく交わり慕われたが、満喜子との確執がもとで離日したともいわれる。ウォーターハウス夫人については機会を改めてのべることにする。

IV 家政塾の成立

近江ミッションが創立されてまもない1915年（大正4）の「湖畔の聲」3月号に八幡婦人伝道消息が載っている。内容はヴォーリズの母ジュリア・ヴォーリズが、もう一人の女性宣教師とともに八幡近郊の26家庭を訪問伝道をした件と、この頃には既に定例化していた料理会の開催報告である。料理会の出席者は毎回14、5名であることと、前月の献立がチキンパイ、マッシュポテト、クリームキャロットであることが紹介されている。

ヴォーリズの両親、ジョン・ヴォーリズとジュリア・ヴォーリズは1914年（大正3）に住みなれた故国を去り、遠い国日本に来た。これより先、ヴォーリズは1913年（大正2）から体調をくずし、アメリカの故郷に帰って静養することになった。おりしもこの時、外遊中の悦蔵は、この知らせを同じアメリカで受けとり、ヴォーリズの故郷コロラドを訪れ

た。再会した二人は、釣や乗馬、水泳など自然の中で健康的な生活を楽しんだ。ヴォーリズの静養のための帰国はこれが2度目であった。最初は来日してそう日も経たぬ1906年（明治39）4ヶ月間コロラドに帰っているが、このように2度もの病気は両親の気持ちを暗いものにした。しばらく養生の後、彼が日本に帰る言い出した時、両親にはかなりの異論もあったであろう。しかし結果的にはヴォーリズは両親を日本に連れて帰った。そして悦蔵を含めた一行4人は、1914年（大正3）3月に横浜に着いたのであった。この時ジョンは62才、ジュリアは58才であった。

1913年（大正2）から八幡に住んでいたウォーターハウス夫人と、八幡に来てまもないジュリアは共に伝道を中心にして英会話や料理を教え、地域に西洋の生活を紹介していった。しかし、日本語を殆ど話さないジュリアは、次第に英会話を教えることが多くなり、ウォーターハウス夫人が料理を担当していくようになった。さらに悦蔵が清野と結婚してからはウォーターハウス夫人と清野が中心になって料理教室が開かれていった。

回数も人数も増えるにつれ、開催の会場はウォーターハウス邸の台所・食堂で開かれるようになり、設備も整えられていった。

台所機器などは近江セールスがアメリカより直輸入した最新のものが揃えられ、調理器具類もアメリカ製の珍しいものが用意された。

ウォーターハウス夫妻が1924年（大正13）1月にアメリカに帰った後は清野が自邸に料理教室を移し、時勢ののってより一層生徒は増えていった。生徒達は、経済的に余裕のある八幡近郊の良家の子女であった。

料理学校が日本で初めて開校されたのは、おそらく1882年（明治15）に東京・日本橋にできた赤堀料理教場であろう。以後、日本料理、西洋料理を教える学校は次々と増えていったが、最初からこれらの学校は立働式の台

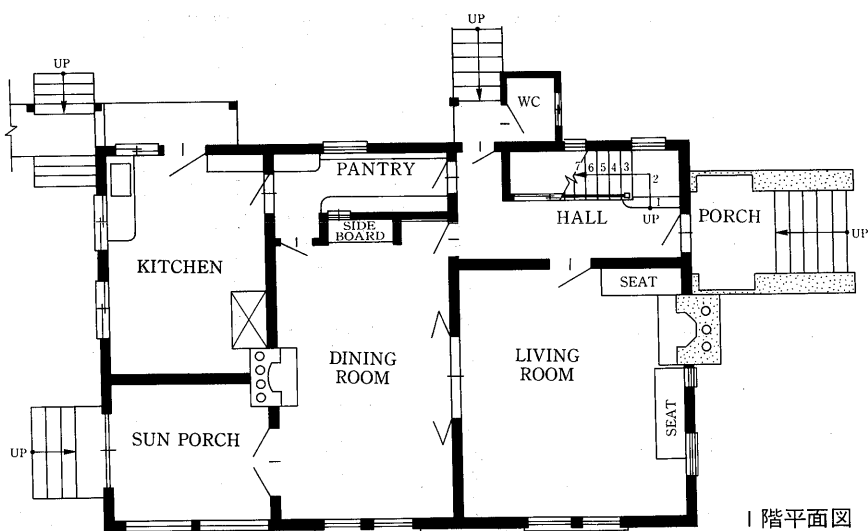
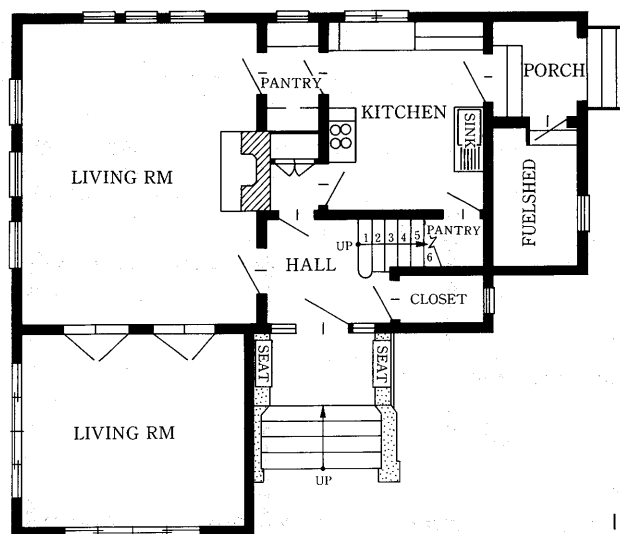


図3 最初に料理教室が開かれたウォーターハウス邸

所を採用した。日本在来の調理場は伝統的に床作業であって、当時の殆どの家庭では座位姿勢が普通であったから、日本女性は料理学校によって立働での調理作業を経験したといえる。座位台所は戦前では珍しいものではなかったから家政塾に通う生徒達も家庭では、座って作業をしたであろう。

また料理学校の教授法は計量することを導

入した。これによって女性達はきびしい修業なしに能率よく誰もが、たやすく高級な料亭なみの料理を自分のものにすることができた。それまで料理を学ぶのは専門家をめざすもののみで、家庭の子女は母親の料理を習っていれば良しとされた。しかし、今迄経験しえなかった料理が食卓に並ぶことの魅力は料理を花嫁修業の一つとして公認させる力とな



1階平面図



正面立面図

図4 家政塾の出発点となった吉田邸

った。家政塾はおもに女学校を卒業した人達のための料理を中心としたまさに花嫁学校であった。

近江家政塾は1933年（昭和8）10月に清野の料理教室を基盤として創立された。最初の2年半は、吉田邸で引き続き料理をはじめ、手芸、編物、その他などが教授されたが、やがて本館が吉田邸の隣地に建設された。1936年（昭和11）4月に工事が始められ、竣工は

同年7月であった。敷地60坪・約200㎡のところに、和風一階建て約40坪の建物が実現した。落成式には、救世軍のブラスバンドの祝典演奏をはじめとして、各方面からも多くの祝辞が届いた。

落成式が行われた時の塾生は約30名で、この時迄の総計では140名を超え、さらに新館の必要性も話題にされた程、隆盛の状況であった。これと前後して出された次年度向け

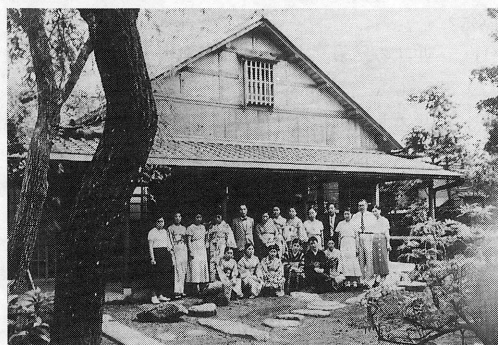


写真6 近江家政塾本館落成, 1933年 7月

現在この建物は外観に当時のおもかげを残すばかりで土地、建物とも近江ミッシヨンの手からは離れている。

の入塾案内には、その教育目的から卒業にいたるまでの細則が示されている。

第一章 総 則

第一条 家政塾はキリスト教の精神に基いて女子の徳性を涵養し、家庭生活に必要な諸技芸の研究を共になして実力ある婦人を養成するを以て目的とする

第二条 修養年限及び定員を次の通り定める

一、本 科 2年、定員20名

一、研究科 別に定める

第二章 学年及び休業日

第三条 学年は4月1日に始まり翌年3月31日に終る

第四条 学期を分けて3学期とする

— 略 —

第三章 学科及び時間割

第六条 学科を以下の如く定め塾生はその中修身、料理、及び他の一科目以上を選択履修するものとする

修身、手芸、料理、裁縫、英語

音楽、茶湯、生花、体操

第七条 各学科の授業時間割は別に定める

— 略 —

第五章 学 費

第十三条 以下に定め毎月始めに納めるものとする

授業料一ヶ月金一円、料理材料費金一円

技芸材料費、その材料費に応じ各自の自弁とする

第六章 卒 業

第十四条 本科を卒業せるものは卒業証書を授与する

— 以下略 —

施設も整い、清野を中心に講師も揃い、順風満帆の船出であった。しかし、一方で時代の不吉な風も吹き始めていた。満州事変、上海事変、国連脱退と進行する軍国主義は第2次大戦に向っており、様々な統制が少しずつ強化されていった。1942年（昭和17）になると料理の材料も思うように入手できなくなってきた。と同時に近江兄弟社にも改革の時がおとずれてきた。事業は休止状態に追い込まれ、この様な苦難の中で悦蔵は健康がすぐれず、ついに病に倒れるのである。1942年（昭和17）11月21日彼は52才の若さでこの世を去った。そして家政塾もこの年の夏に突如としてその歴史の幕を閉じるのである。その後は近江兄弟社に教育事業に吸収されるが、家政塾の形態は再建されることがなかった。

清野は1948年（昭和23）4月6日にその60才の生涯を閉じた。

V おわりに

本篇では家政塾設立にいたるまでの過程をその時代背景とともに追跡した。明治・大正・昭和と続く時代の変遷は欧米化の一つの道のりでもある。現在、私達のごく自然に家族と同じ食卓で食事を共にしている。しかし、ウォーリズの来日当時、あるいは清野が八幡に来た当時は、日本人の食事の光景はこうではなかった。家族の各々が膳を持ち個別に食事が行われ、また家族間の身分差も顕著で、共に食べる行為は存在しなかった。一つの食卓

で家族が揃って顔を合わせて食べる様式は、欧米の生活からとり入れた概念であったと考えられる。ヴォーリズは多くの住宅を設計した。彼は、住宅設計のプロセスの中で家庭生活の重要性を説き、それは時としてキリスト教の伝道とも重なった。食堂は一家団らんの家族生活の重要な場所である、そして食堂は家庭教育の実習室となるべきであるとして、食卓の場の充実を計った。それは住宅という器からの洋式生活の導入であった。

それに対して、ミッションの女性達は自分達の暮らしを通して西洋を紹介していった。料理、テーブルマナー、洋式エチケット、洋裁、刺しゅう、編物、音楽などが一般的に普及することによって、洋式生活、洋風が何であるかが理解されていった。

特に女性達は、それを流行という感覚でとり入れ、身につけていった事柄も多い。家政塾もそうした時代の流れの中での一つの現象であるともいえよう。家政塾の卒業生で、今もなお元気で活躍中の方が、家政塾について語る時、そこには時代の先端を体験した誇りが感じられる。そして彼女達が周囲に与えた影響や生活の改革者であったことの意義を考える時、教育の存在の重要性を感じずにいられない。

今回の家政塾の成立にいたるまでに引き続き、その具体的な教育内容や方式についての資料を現在整理している。さいわい悦蔵氏の御長男吉田希夫氏は、池田町の住宅に住み続けてさらに、ここで英語塾など開いていらっしゃる。この調査に当っては、希夫氏の多大な御援助を頂くことができたことは大きな喜びであった。また、ヴォーリズの設計図の参照については大阪芸術大学の山形政昭先生の御好意を頂いた。ここを借りて感謝の意をあらわすこととする。

<注>

- (1) 「近江の兄弟」吉田悦蔵、1913、近江兄弟社より。
- (2) キリスト教青年会 キリスト教の信仰にもとづいて理想社会の建設を目的とする世界的な青年の団体。1844年ロンドンで創立された。日本では1880年（明13）東京に創立されたのが始まりである。
- (3) (1)と同じ。
- (4) ガリラヤ丸命名の由来、「湖畔の聲」創刊号より「2千年の昔、イエスが風光明媚のガリラヤ湖畔に立ちて、雄大莊嚴なる御聲を天下に揚げ給ひしを、我は我が琵琶湖の辺に立ちて反響せんとする聲である。……」
- (5) 1887年（明20）アメリカ、キリスト友会フィラデルフィア年会の宣教師コサンド夫妻により開設された女学校。当初、伝道は茨城県下に主力がおかれたため、同県からの寄宿生が多かった。戦後は国際平和を重んじるクエーカーの生き方を通して平和民主教育の実践をしている。
- (6) 1884年（明17）アメリカ、メソジスト監督教会婦人宣教師ヴァン・ペテンによって横浜に設立された婦人伝道師養成学校。後に日本女子神学校に発展解消、さらに青山学院神学部に吸収されて、その女子部となった。
- (7)(8) ヴォーリズ設計のオリジナル図面より、平面図・立面図とも書き改めた。

<参考文献>

- 「吉田悦蔵伝」沖野岩三郎 1944 近江兄弟社
「ヴォーリズの建築・ミッションユートピアと都市の華」山形政昭 1989 創元社
「ヴォーリズの住宅：伝道されたアメリカンスタイル」山形政昭 1988 住まいの図書館出版局
「近江の兄弟」吉田悦蔵 1913 近江兄弟社
「お雇い外国人⑤教育宗教」重久篤太郎 1968 鹿島研究所出版会
「滋賀県の百年」傳田 巧 1984 山川出版社
「日本キリスト教歴史大事典」1988 教文館
「湖畔の聲」近江ミッション 1911～
「台所道具の歴史」栄久庵憲司＋G K研究所 1976 柴田書店
「日本の食事様式」児玉定子 1980 中央公論社